

■嫁さんはエッセイのネタ

よめはんが、頭のでっぺんが痛い、といいだした。かなりの痛みだという。

「えらいこっちゃ。くも膜下とか、硬膜下出血いうのとちがうやろな」

わたしはあわてふためいた。よめはんにもしものことがあると、エッセイのネタに困る。

よめはんはたーやんと並んで、このエッセイの準レギュラーなのだから。

=>帯状疱疹だった。

■嫁さんはエッセイのネタだろうけど、こんな書かれ方をしたら…。

よめはんが“シミとり”に行く、といいだした。形成外科でシミの部分にレーザーをあてるのだという。

「それはおまえ、どういう原理でシミがなくなるんや」

なにごとにも懐疑的なわたしは訊いてみた。

「レーザーでシミを焼くんやんか」

よめはんはもともと色白で、若いころはソバカスだらけだった。それがいまはすべてシミと化し、人いちばい大きな顔容にカツオのふりかけのごとき彩りを添えている。

「シミが焼けたら、皮膚も焼けるがな」

「そんなこと、行ってみたら分かる。近所の××さんもきれいになってたわ」

近所の××さんはよく知っているが、あんパンが水たまりに落ちて十回ほど車に轆かれたような顔だ。シミがあろうとなかろうと美醜を超越している

■50代のオヤジが集まってする話

先月、高校の友だちのおとうさんの通夜に行ったとき、五十半ばのオヤジが十数人集まって話したのは、病気のことばかりだった。ひとりは肺ガンで片肺の一部を切除し、抗ガン剤で髪が薄くなっている。ひとりは酒の飲みすぎで中性脂肪値が600を超え、痛風発作を何度も起こしながら、まだ酒がやめられない。ひとりは肥満と酒で血糖値が200以上あるのに食餌療法をせず、運動もしていない。まことに団塊の世代のオヤジというのは破れかぶれであり、現実に病名を告げられてもなお、生活を根本から改めようとしなないのだ。

「さすがに煙草はやめたけど、酒はやめられんな」というのもいれば、「旨いもんを腹いっぱい食わなかったら、働く気力も湧かへんで」というのもいて、こいつらはほんまになにを考えとんのや、とわたしは感心した。

そうして、彼らがいちようにいったのは「背がちぢんだ」だった。「そんなことあるんかい」と、わたしは半信半疑だったが、「五十年以上、立って歩いてるんやで。ちぢむのはあたりまえやないか」と笑う。そういえば高校のころ、わたしより背の高かった男が、いまは明らかにわたしより低い。「四センチもちぢんだがな」と、彼はいった。

■困れば結局、嫁さん頼り

深夜の十二時に限が覚めた。左膝はまだ痛い。起きあがろうとしたら、激痛が走った。

あまりの痛みにうめいた。膝は赤く腫れ、ひどい熱感がある。起きあがるどころか、座るのもままならない。左脚は棒になったままだ。

ここにいたって、ようやく気づいた。痛風だと。

這って薬箱を開け、特効薬のコルヒチンを探したが、ない。痛みで吐き気がする。

よめはんが救急病院に電話した。三軒目でようやく診療してくれるという。院内薬局にコルヒチンもあるらしい。

こういうとき、よめはんは頼りになる。車に乗せられ、ヒイヒイいいながら病院へ行った。薬をもらい、家に帰って横になったが、少しでも原稿を書きためておかないと、火曜日の選考会に行けない。